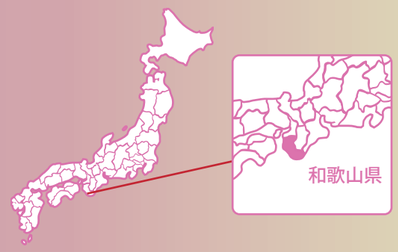
第25回防災まちづくり大賞

消防庁長官賞

夢をかたり、汗をかき、絆をつむぐ
～心を一つにして地域の被災者を支援する～



▶設立年
昭和２３年

▶団体構成
１４１名

▶所在地
〒649-0133
和歌山県海南市下津町下287-2

▶連絡先
TEL　073-492-2047
FAX　073-492-5562

▶取組開始年月
平成２３年　４月～

海南市立下津第二中学校

【団体概要】

海南市立下津第二中学校は、和歌山県海南市の南西に位置し、校区は市内で最も広く、2つの小学校区からなる。西には塩津、大崎という2つの漁港があり、海と山に囲まれ、中央には加茂川が流れる自然豊かな地域である。中学校がある海南市下津町地区の臨海部には、石油化学工場や造船業、金属加工業の工場などが立地しており、古くからの民家や狭隘な道路が多い。また、県外へ進学や就職する若者も多く、少子高齢化や核家族化が進んでいる。

海南市立下津第二中学校では、「夢をかたり、汗をかき、絆をつむぐ」を教育目標とし、「地域とともにある信頼される学校づくり」を重点目標に、ボランティア活動に積極的に取り組むことで、市民性を身に付けるとともに、地域を知り、将来の災害に対応できる知識と行動力を身に付けるよう取り組んでいる。

【背景】

下津第二中学校では、南海トラフ地震の津波浸水想定区域内に自宅や通学路がある生徒が多いことから、東日本大震災を教訓として、南海トラフ地震に備えるため、海南市や海南市教育委員会と連携して避難体制の見直しを行うとともに、これまで9年にわたり、中学3年間を通じて、津波避難訓練や防災学習等を積み重ね、生徒が自ら命を守るための知識と行動力を身に付けることができるよう取り組んでいる。

東日本大震災から約１０年が経過し、中学生は、東日本大震災の被害や避難所などの様子がテレビで連日放送され、不安で心と体の震えが止まらなかった世代から、東日本大震災を教科書で学び、災害を「自分ごと」にし難い世代に移りはじめている。

これまでは、被災後の「いのち」を守るための行動を中心に防災学習を進めてきており、避難生活や復旧・復興期の「くらし」について学ぶ機会が少なかったが、少子高齢化や地域活性化などとともに、災害を複合的な地域課題の一部ととらえ、行政や企業、団体、地域内外の方々と連携し、生徒自身が地域の一員として災害を「自分ごと」に考えることができるようになることが求められている。

【取組の内容】

【令和元年度の取組】「いのち」と「くらし」の実践的防災学習

（1）災害を学ぶ
- 「災害関連死、在宅避難、復旧・復興」を学ぶ
  （講師：海南市・海南市　社会福祉協議会）
- 「被災地の知見と教訓」を学ぶ
  （講師：兵庫県教育委員会　震災・学校支援チーム「EARTH」）
- 災害時の食事づくり

（2）津波避難、災害ボランティア活動
- 海南市防災訓練に参加し、津波避難訓練を実施（中学2、3年生）
- 災害ボランティア活動訓練を実施（中学１年生）
  塩津・大崎地区の避難所に避難している地域の方々や在宅避難者の健康状態の聞き取り等をグループで行う。中学生の主な役割は、避難者への災害関連死を防ぐための啓発活動。
  （グループは中学生、校区の小学生、全国から集まった大学生等、福祉系専門職、一般の5名構成）

（3）中学生と大学生たちによるグループワーク、発表
中学生が、約１０年前に同世代だった全国から集まった大学生たちとともに学び、グループワークを行い、成果発表を行う。

<第1部>
- 「気仙沼市の津波来襲、津波火災映像」から学ぶ
- 「気仙沼市立階上中学校の卒業式
  卒業生代表梶原裕太さんの答辞」から学ぶ
- 「気仙沼市立気仙沼中学校二年
  斉藤日向子さんの被災後の作文」から学ぶ

<第2部>
- 「東日本大震災を振り返って感じたこと」、「中学生・高校生が南海トラフ地震に備え、事前にできること、発生後にできること」を意見交換
- グループ発表
- 学生代表（東北大学４年 渡邊勇さん）から中学生へのメッセージ

【成果】

中学生が、小学生、大学生等、福祉系専門職、一般ボランティアとチームになり、一緒に汗を流し、地域の方々への支援活動を行うことで、ボランティア活動の意義や連携の大切さを学んだ。また、中学生が、訓練やグループワークを通じ、東日本大震災の発生当時に小・中学生であった大学生たちと一緒に活動し、同じ目線で東日本大震災や南海トラフ地震について語り合うことで、地域課題を「自分ごと」として捉えることができた。

<訓練後の生徒の自由意見（記述式）>
- お祭りや行事など地域の人と関わることをしたい。
- 避難者に体調を聞いて少しでも手助けしたい。
- 命の大切さ、震災の大変さを学んだ。
- 協力する大切さを学んだ。被災地を訪問してみたい。
- 皆で協力し助け合うことを覚えた。
- 仲間と協力する楽しさ、難しさを学んだ。
- 地域のボランティア活動に参加したい。
- 地域の人に思いやりの気持ちを忘れない。
- 色んな年代の人と関わりボランティアの大切さを学んだ。
- 住んでいるまちは高齢者が多いので助けることができるようになりたい。

<アンケート結果（訓練前後で集計）>
あなたは、大人になっても海南市に住みたいですか。
はい　5.1%増（訓練前29.1%　訓練後34.2%）
いいえ　2.6%減（訓練前7.6%　訓練後5.0%）

被災者への聞き取りの様子（避難所）

被災者への聞き取りの様子（福祉スペース）

食事の支援の様子（避難所）

中学生と大学生たちによるグループワーク

選定委員 Comment

海南市立下津第二中学校は和歌山県海南市の南西に位置し、南海トラフ地震の津波浸水想定区域内に自宅や通学路がある生徒が数多く通学している。ここでは東日本大震災を教訓としながら、南海トラフ地震に備え、これまで9年にわたって津波避難訓練や防災学習等を積み重ね、生徒が自ら命を守るための知識と行動力を身に付けることができるための取り組みを続けている。

具体的には、津波避難訓練や避難所運営訓練、災害ボランティア活動訓練をはじめとして、東日本大震災発生時に中学生だった学生を全国から招き、中学生と学びあうグループワークや、近年では災害関連死や在宅避難、復旧・復興までもターゲットにしながら取り組みを続けている。そして、ここでの取り組みは校内での防災教育のみにとどまらず、防災を通じて地域との繋がりを作ることを重視したものになっている。これにより、生徒一人一人に「災害時にはみんなで助け合う」という姿勢が育まれ、実際に「大人になっても海南市に住みたい」と答える生徒が増えた事実は、特筆すべき成果と考えられる。

このように海南市立下津第二中学校の取り組みは、中学校という場を活かして防災教育のみならず、地域防災に対しても大きく貢献を果たし、さらに地域への愛着形成にも繋がる優れた事例と考えられ、全国の防災まちづくりの参考になるものと高く評価される。